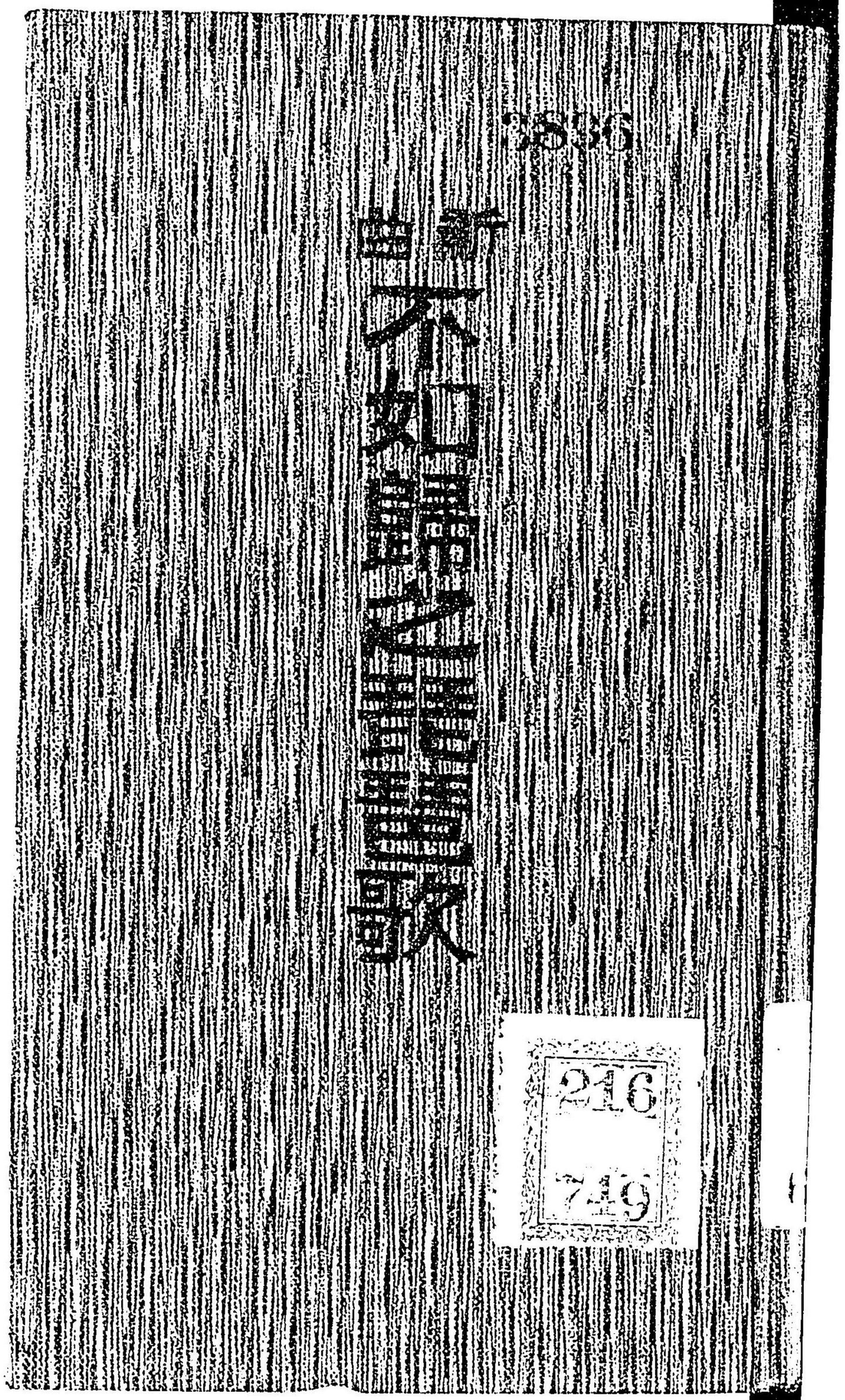
216
749

特63
667

吟者の必得

本書は近代の悲劇なる琵琶歌に創作せるもの春風陶々たるの家庭も忽にして暗黑の涙となり遂に世を挙げて袖を絞るに至らしむ

本書は云ふ迄もなく從來あり振れたる琵琶歌と全く其趣を異にするが故に隨て歌調も自から其新たなるを見るべし是れ本書の特色にして大に天下に誇る所以なり

明治42.7.3
内交

而れども著者不學或は其遺憾おきを怖る吟者乞よ幸に其不備を補けられん事を

曲譜の解

一曲譜は何人にても解り易きやう直接に文字を以て其要を示せり故に吟者は先つ其譜を諳んじて獨吟に備へられよ

▲地〜〜〜〜〜〜は地聲の意味にて即ち自己の聲にて謠ふもの

▲地の地〜〜〜〜〜〜は右と同じ意味にて一段低き聲なり

▲大干〜〜〜〜〜〜は吟聲の最も大なる節さす

▲中干〜〜〜〜〜〜吟聲の中なるもの

▲干……は地聲より一段高き節を云ふ

▲吟替り……は刺撃の節にして凡てに情を含もの

▲切り……は一時吟聲を高めて直に下げ落して切る

▲落し……ば吟じ來りて其の調を下げる時に用ゆ

▲崩れ……は夫に活氣を添ゆる節なれば一段に力を入れる事

目次

噫々浪子孃……一

伊香保の春……三

蕨狩り……八

其二段……一三

其三段……一七

伊香保の面影……二一

横戀慕……二六

御用商人……三一
姑と嫁……三五
浪子の書簡……三九
不如歸と告天子……四二
其二段……四四
其三段……四六
浪子の病……五〇
逗子の浪……五二
其二段……五七

ほとゝぎす……六二
逗子の涙……六八
豐島の海戰……七三
黃海の役……七五
其二段……七七
旅順口攻擊……八〇
其二段……八三
其三段……八六
千々曲之戰死……八六

金州城其一段……九〇
其二段……九一
旅順口の偵察……九三
黄海の激戰其三……九四
川島武夫の負傷……九四
武夫の負傷其四段……九九
威海衛の陷落……一〇三
威海衛の占領……一〇五
浪子の離別……一〇八

名殘の逗子……一一一
佐世保病院……一一三
戰後の墓地……一一七
浮世の眺め其の一段……一二〇
其二段……一二四
其三段……一二九
夜半の眺め……一三三
瀧車と瀧車……一三五
浪子と武夫の生さ別れ……一三五

目次

浮世の戀……一三八
其二段……一四一
青山の墓地……一四五
浪子の墓……一四五
露霜……一四八
枇杷の花……一四九
述懷……一五〇

終

新曲

不如歸之琵琶歌

青年琵琶會編纂

噫々浪子孃

「地」水の流れと人の身の
「地」誰が言ひ染めし言の葉ぞ
「大干」哀れ憂き世の浪子孃
「地ノ地」人も羨む華族にて
「地ノ地」行末わかぬ習ひとは
「干ノ切」思ひば徐ろ涙なる
「地」身は皇室の藩塀と
「地」武門の譽れ隱れなき

「千　陸軍大將公爵の
「千　蝶よ花よと育てられ
「千　浮世の憂さも世の塵も
「地　如何で知るべき知らるべき
「千　笑ふて暮す身なりしが
「大千　知るや其の年八歳の秋
「中千　二人の姫を後になし
「地　臨終の前に浪子をば
「地　痩せて細りし其手にて
「中千　山片家の姫にして
「千　掌中の玉と愛てられて
「地　心にかゝる叢雲も
「地　只々面白く樂しげに
「千　物の哀れも是よりぞ
「千　慈愛餘れる母人は
「中千落シ　此の世を去りて神の旅』
「地ノ地　病の床に引寄せて
「地　確と吾子の手を握り

「地　浪や妾が身は遠い國
「地　身體大事に成人しく
「千　我が身の病ひ此の命
「地　身の行末も知るべきと
「地　落る涙はハラ〳〵と
「中千　又も涙の顔を上げ
「地ノ切リ　此の阿母さんを記憶てか』
「千　嬰て恩愛の掌らに
「地　肩に垂れたる剪り下を
「地　行いて戻りの遲ければ
「地　父上樣にお使ひよ
「千　今五ツ年も長からば
「中千　聲さい曇る忍び音に
「千　少時言葉も無かりしが
「崩レ　浪や阿母さんが居なくとも
「地ノ吟替リ　聲に無量の思ひあり
「中千　綠の黑髮總々と
「地　撫で玉へたる面影は

「干」昔しを今に爲すよしも
「地」斯くて一年せ過ぎてより
「干」去れど家庭は冷かに
「中干」木枯し吹くや秋の空
「地」水の流れと人の身の
「地」實にや浪子の身の上と

「干ノ吟替リ」憐れ血に啼く不如歸
「地」後なる母は來給へぬ
「中干」春は昔しの春ならで
「干」悲しき事も是よりか
「地」行末わかぬ習ひとは
「干ノ切リ」後にぞ思ひ知られたり

伊香保の春

「地」春の日脚も早や西に
「中干」足尾・赤城の峰々は
「地」譬へ難なき景色をば
「干」茲、上州の伊香保なる
「地」悅び顏の婦人あり
「干」花の顏せ月の眉
「地」空は次第に暮れ行きて

「地」遠き眺めの日光や
「干ノ替リ」夕日を浴びて花やかに
「地」我もの顏に眺めつゝ
「地」温泉宿の障子打ち明けて
「地」年は二八を二ツ三ツ
「中干」丸髷の姿の品もよし
「干」見渡す限り野も山も

「地」只一色に薄暗く
「千」白きは月の影ばかり
「地ノ地」五十路餘りの老女なり
「地」やよ、奥様よ奥様よ
「地」もしやお風邪を召しては
「千」抑や二人は何人ぞ
「地」老へして姥のお幾なり
「中千」人待顔の其の風情
「千」軈て二人に迎へられ
「中千」僅かに見ゆる山の端に
「地」折から此所へ入り來るは
「地」優しき顔にほゝ笑みて
「地」日暮の風の涼しさに
「中千」憂ふる言葉に情けあり
「千」若きは川島浪子にて
「地」互に何か語りつゝ
「中千ノ吟替リ」待たれし人は誰なるか
「地」左も勇しく活潑に

「地」一室に入れる壯夫は
「千」千代を八千代に川島の
「地」昨日の夢の冷かに
「地」櫻、花咲く春の日に
「千」海軍少尉男爵の
「中千」目出度く二人手を把りつ
「中千」新婚旅行の樂みを
「地」千代に八千代に長かれと
「千」是ぞ浪子の良人にて
「中千替リ」武夫の君と知られたり」
「地」悲しき身にも幸ありて
「地」出雲の神の手引にて
「千」川島家に輿入や
「地」乳母を供に迫々と
「千」伊香保に結ぶ春の夢
「千」祈るは互ひの心なり

蕨狩り

「地」遙かに流るゝ阪東や
「干」飽かぬ景色を眺めつゝ
「中干」長き春日も短しと
「地」只々天國の遊びにて
「干」或日二人は連立ちて
「地」姥のお幾も嬉し氣に

「地」近くに聳ゆる榛名山
「地」問いつ語りつ嘻々として
「地」嬉しく笑ふ樂しさは
「地」人も羨む計りなり
「中干」近き野山に蕨狩り
「地」一人の女中を語らひて

「地」中飯の仕度を用意しつ
「地」斯て伊香保を後にして
「地」觀音堂の後より
「干」山の平に來て見れば
「干」遠く上毛の平原を
「中干」繪を見る如き心地よさ
「地」野曉の恨の黑土に
「中干」綠の氈を見る如く
「干」千種の花も愛らしく

「中干」軈て後より續さける
「地」彼方に見ゆる水澤の
「地」進む野山の一里半
「大干」下は赤城の山々や
「地」山の間より見晴して
「地」足元近く眺むれば
「地」芽出づる草の種々は
「地」此處や彼處に咲き匂ふ
「中干」心も暢るそよ風に

「地」浪子は深く興に入り
「地」姥は嬉しさ堪へ難く
「地」お久し振りのお唱歌ぞと
「中干」幾年月の其の間
「干ノ崩レ」眞の愛のあり〳〵と
「干」實に頼母しく見えけるが
「地」彼方を指して蕨狩り
「大干」武夫は後を見送りて
「地」浪子を自己が膝近く
「中干」唱ふ聲さい面白し
「地」我を忘れて悅びつ
「地」餘念も更になかりしは
「中干」慈母となりつゝ育てたる
「地」顏の面に見はれて
「地」軈て女中と共々に
「地」心樂しく出で行きぬ
「地」さても建氣な姥やぞと
「地」語る聲さい優しげに

「中干」迦かの方を指さして
「干」左手に見ゆる白壁の
「地」此方に碧く細長く
「干」利根の河水其の先は
「干」妙義の峰も明らかに
「地」覗くが如く顏見れば
「地」露を含める風情にて
「干」巫山の神女に髣髴たり
「干」千代に八千代に長かれと
「地」浪さん彼れを御覽じろ
「地」翻々するは澁川で
「中干」リボンの如く流るゝは
「中干」音に名高き赤城山
「地」扨も美事な景色ぞと
「地」笑ふ姿は海棠の
「中干」小野小町か楊貴妃か
「大干」あゝ其樂しみよ其愉快
「地」浪子は心に祈りつゝ

「地」武男の膝に手を掛けて
妾は何時迄斯ふしてと
「地」折から黄色の蝶二つ
「中千」或いは下に又た上に
「地」飛べる彼方の木蔭より
「地」帽子被りし影一つ
「千」武夫は屹と打ち見れば
「中千」漏らす溜息と共々に
「千」離れ難なき鴛鴦の情
「地」夫婦の中が睦まじく
「中千」袖を掠めて、ひら〳〵と
「中千」草踏む音のさわ〳〵と
「中千」彼れは呼びけり武夫君
「千ノ切」是れぞ從兄の千々曲なり

伊香保

「地」山の小笹を踏み分けて
「地」即ち武夫の從兄なる
「千」花は櫻木人は武士
「中千」軍服姿嚴めしく
「地」昔偲ぶの敦盛も
「地」惜や口元何處となく

(二)

「地」來りし人は何者ぞ
「地」陸軍中尉千々曲なり
「千」櫻の花の咲き匂ふ
「地」武士に似氣なき色白に
「中千」斯くやと思ふ殿なれど
「地」鄙しく見ゆる其れのみか

「大干　心の黒き漢なれば
「吟替リ　去れど其の身は苟しくも
「中干　參謀本部の席末に
「地　曾て浪子に懸想して
「地ノ地　文に送りし事ありき
「地　今しも此に現はれし
「地　姥も浪子も驚けり
「大干　左も嬉氣に勇み立ち
「地　女軍は僕を攻め立て
「地　素行兎角修まらず
「崩レ　我が陸軍の首腦たる
「落　機敏の聞えありと聞く
「地　心の底の數々を
「吟替リ　彼は戀路の惡魔なり』
「地　思ひも寄らぬ其の聲に
「干　武夫は樣子知らざれば
「中干　好くぞ來りし千々曲君
「地　探りし蕨の少なしと

「地　ヤレ其の質の惡しとて
「干　君來るからは何のその
「地　愛嬌餘る一と言に
「地　軈て姥は仕度にと
「干　斯て三人は又た少時
「地　いざや宿りに歸らんと
「崩レ　夕日は何時かキラ〳〵と
「大干　金色の如く輝きて
「大干崩レ　崩黄の色ぞ添にける
「地　我れは今しも負け軍
「中干　海陸一時に攻め立てむ
「落シ　互ひにドッと笑ひ合ふ
「切リ　女中と共に歸りける
「地　蕨を採りつ語りつゝ
「干　道の芝草踏み別けば
「大干　物聞山の彼方より
「干　四邊の草は一倍に
「地　武夫は千々岩と並び立ち

「地」浪子は後に從へり
「千」往來の人もさらざれば
「地」草苅る童に曳れ行く
「千」武夫は先に立ちながら
「地」壑を涉りて又た坂に
「地」膝打ちながら語るやう
「地」少時待たれよ千々曲君』
「千」浪子を無理に押止めて
「地」里を離れし山路の
「地」物や靜かに只だ聞くは
「地」牛の聲のみ哀れなり
「千」最と活潑に勇ましく
「地」登る折りしもハツタリと
「千」忘れて來たよ洋杖を
「地」妾しも供と案じける
「千」彼方を指して驅け行きぬ』

伊香保

「地」世に戀風のなかりせば
「大千」實に戀風の其の爲めに
「千」茲に武夫の去りてより
「地」千々岩の右手に立ける
「千」が恰かも虎口に在る如し
「地」千々曲は浪子を打見やり

(三)

「千」人の心は神ならめ
「大千」千々種々になるぞかし
「地」浪子は一人悄然と
「地」其の心根を案ずれば
「地」機會こそ好けれ此の時と
「地」あゝ金の世や金の世や

「地」さても浮世は金なるか
「千」例へ男は間抜でも
「大千扇レ」金と爵位の無き身には
「地」生命を掛て慕ふても
「千」如何に虚榮の世とは云へ
「地」さは去りながら御身には
「地」他に事寄せ其れとなく
「千」聞に堪へざる言の葉に
「千」屹度千々岩を打ち睨み
「千」金と爵位があるならば
「大千」馬鹿でも嫁に行くなれど
「千ノ扇シ」神に祈りて焦れても
「地」唾さい掛けぬお利巧は
「大千」是れが當世の姫御前か
「地」斯る心は無からんと
「地」叶はぬ戀の怨み事
「中千」流石浪子も默し居ず
「千」女一人と侮りて

「大千」さても無禮の振舞ぞ
「大千扇レ」言ふて御覽じ其の言葉
「千」我が父上に相談へて
「千」心の底を云へもせず
「地」男子にあらぬ其の仕方
「地」忍る浪子の顏を見て
「地」折りから來る牛追に
「地」無言のまゝに冷かに
「千」秘密を願ふ面憎さ
「千」武夫の前に今一度
「中千」只だ其れのみか何故に
「大千」大和男の潔よく
「地」無禮に餘る艶書の文字
「千ノ切リ」最早容赦はしなせぬと
「地」彼れも面に筋立ぬ
「地」心の角も折れけるか
「地」笑ふ聲さい忍ばせて
「中千」此時彼方にギシ〳〵と

「大干」靴の音高く響かせつ
「中干」打ち振りながら坂道を
「地」失敬と云ふも活潑に
「地」其の顏色の進まぬは
「地」千々曲は其れと心付き
「干」直ぐと氣轉も口輕に
「地」又た浪子の方を打見やり
「中干」御身の上を案じてと
「地」三人の影は又暫時
「干」片手に持てるステツキを
「干」驅けつゝ來るは武夫なり
「地」チラと浪子の顏を見て
「干」如何がせしぞと尋ねしに
「大干」元來奸智に長けし其身とて
「地」武夫の顏を眺めつゝ
「干」君の戻りの遲ければ
「地」俄かに作る笑ひ聲
「地」路傍の草に撮りつゝ

「地」或は黑く又た淡く
「地」伊香保の宿に戻りける

伊香保の面影

「地」落花の雪に踏み迷ふ
「地」他かぬ眺に日暮里や
「中干落」もゆる思ひも赤羽の
「干」上野飛鳥の櫻狩り
「干」田端王子も何時の間に
「地」驛路を越て見渡せば

「千」名も荒川のたぎり行く
「中千」行くや眞直に大宮の
「地」右と左に岐れ行く
「千」上尾桶川鴻の巣や
「千」吹き來る風の吹上に
「大千」堤に咲ける櫻花
「地」本庄で御座る神保原
「地」綠に見ゆる新町や
「中千」妙義の峰を仰ぎつゝ
「地」岸に沿えたる蕨宿
「地」人煙繁き少都會
「地」往き來の瀧車も又此所に
「中千」春とは云へど朝嵐
「千」其名も知るき熊谷の
「地」色も深谷と譽め行けば
「地」見渡す限り野も山も
「千」行手に見ゆる倉賀野に
「地」高崎驛を後にせば

「地」早や目の前に前橋や
「千」山路を辿る三里半
「大千」層樓高厦連なれる
「地」抑もや伊香保の風景は
「地」大谷の間を開きつゝ
「千」吾妻の諸山手に取りて
「千ノ切リ」旅客の情を慰めつ』
「千」金朱煌燿蒼巖と
「中千」燃ひつ滴る計りかは
「千」茲に瀧車も澁川の
「中千」赤城榛名を見晴して
「千」伊香保の宿に到るべし
「地」右に溪流微かなる
「地」前は子持小野子の山々や
「中千」變幻極りなき雲煙は
「地」さて大谷に古廓あり
「千」光輝互に映帶し
「地」一は明がに又昏く

「地」 兩者相和して冷かに
「干」 邃然として仙境の裡に
「中干」 是ぞ伊香保の榛名なり
「地」 大館小館山に依り
「干」 丹醸あり京魚あり
「地」 陶然として塵を去り
「地」 危欄に凭りて悠然と
「中干」 心の底も洗はれて
「地」 斯くて其夜も闌に

「地」 人の顏色を照しつゝ
「地」 遊ぶ思ひを有するは
「地」 山下は即ち伊香保にて
「地」 崖に沿ふては連なりつ
「干」 歌舞歌絃の娘子あり
「干」 其身は浴衣に輕々く
「地」 青葉の山を看る時は
「干」 一の悶事も勿るべし
「地」 心靜かに臥すあらば

「干」 百籟茲に打ち絶て
「地」 明日の遊びに入りぬるか
「干崩」 青嵐の裡にある如く
「地」 斜に青嶺を照して
「地」 浪子は武夫と携いて
「地」 伊香保に盡す樂しさの

「大干」 夢は搖々又た將さに
「地」 軈て覺むれば身は猶も
「地」 締視すれば枕邊の燈火は
「干ノ切リ」 煙の如く蒼茫たり
「地」 新婚旅行の樂みを
「地」 心の裡や如何ならむ

横戀慕

「地」戀に上下の差別なく
「地」抑もや戀路に迷ひたる
「干」彼れも武門の流れなる
「中干」今は昔の夢の跡
「干」討死なせし其後は
「地」憐れ其年六歳の秋
「地」色には貴賤の隔なく
「地」千々曲安彦何者ぞ
「干」父は鹿兒島藩士にて
「地」王政維新の戰爭に
「地」母も病に世を去りて
「地」浮世の孤兒となり果て

「地」西も東も別ぬ頃
「地」叔母は武夫の母にして
「地」叔母なる人は身寄とて
「地」叔父なる人は悦ばず』
「中干」彼れは木綿を纏ふのみ
「干」あゝ金の世や金の世や
「干」自己が智識と吾が拳
「干ノ落シテ」果は武夫を惡みつゝ
「地」去れば浮世の裏表
「地」叔母なる人に身を寄せぬ
「干」即ち浪子の姑なり
「地」彼れ安彦を憐めど
「地」武夫は絹を着すれど
「干」彼れはつく〳〵悟りける
「干」地位財産のあらぬ身は
「地」力らに渡る外なしと
「地」又た其の叔父を怨みける
「地」人の心に取り入りて

「千 世に立つ術の捷徑を
「地 參謀本部に入りけるが
「千 いで權門に立ち入りて
「地 心を華族に注ぎしが
「千 片山家を睨みつゝ
「千 早くも令嬢を慕ひける
「地 慈母に別れし其後は
「千 愛は一層深けれど
「中千 兎角浪子を疎みつゝ
「地 辿り〳〵し甲斐ありて
「地 我身の地位を作るには
「千ノ落 其の結婚を求めんと
「中千 狡智に長けし其身とて
「地 其の奥向に取り入りて
「大千 令嬢は花の浪子なり
「地 可憐の娘よと將軍の
「千 後なる母は冷かに
「地 好き緣先のあれかしと

「地 思ふ心の穗に出るを
「千 是ぞ出世の端緒と
「地 燃ゆる思ひを筆にして
「地 思ひし事の儘あらぬ
「千 千々曲は其日命ありて
「地 三月餘りの旅び枕
「千 心を籠めて慕へたる
「地 人もやあるに我が從弟
「大千 早や結婚の濟まんとは
「地 千々曲は其れと悟りつゝ
「中千 心を千々に打ち碎き
「千ノ落 或日浪子に送りける
「地 其れが浮世の習ひなり
「地 遠き師團に出張し
「地 憂きを重ねて來て見れば
「千 浪子は自己が留守の間に
「中千 川島武夫と目出度も
「地 あゝ夢か夢ならば

「地」早く覺めずや覺めよかし
「千」地團太踏んで腹立つ』
「地」東都に歸る道すがら
「千」購め來りし友染を
「地」紙屑籠に投げ込て
「地ノ地」心靜かに思ふやう
「千」事大將に聞えなば
「地」且つは艶書の氣に懸り
「地」我身の樣子探らんと

「地」扨も不覺よ不覺ぞと
「地」戀しき人に贈らんと
「地」態々京都に立ち寄りて
「千」寸々に引き千斷り
「地」額に筋を立てけるが
「地」左は去りながら去りながら
「中千」後の出世の爲ならじ
「地」伊香保に行て其れとなく
「地」又も旅路を驅け行きぬ

「千」此の時武夫と浪子等は
「千ノ落シ」其の面影を打ち見たる

「地」二人揃ふて蕨狩り
「地」千々曲の胸や如何ありし

御用商人

「地」世は緣日の盆栽を
「地」只々何事も賽の目の

「地」買ふと賣るとの勝負にて
「地」夢の浮世の綱渡り

「地」裏と表の掛引に
「干」上の御用を身に受けて
「地」笑ふて暮す商人に
「地」五十の上を二ッ三ッ
「地」今日しも瀧車に打ち乘りて
「地」圖らず千々曲の顏を見て
「中干」豫て懇意の間とて
「地」我家の門へ導きぬ
「中干」何を語るか密々と
「地」參謀本部や陸海軍
「干ノ落シ」辛き憂世を面白く
「干」山木佳珠三と聞えしは
「干」容易に喰へぬ男なり
「地」我家に歸る途すがら
「干」胸に巧みのあるなるか
「干」名を夕食に事寄せて
「干」一と間の裡の差對へ
「干ノ切リ」上の御用か金儲け』

「地」茲に山木の娘にて
「地」年は二八の上二ッ
「干ノ落シ」浪子と同じ友なりき
「干」邸に仕へし緣ありて
「地」心窃かに思ふやう
「中干」武夫は一人息子にて
「干ノ切リ」大殿既に世を去りて
「干」我子お花を嫁して
心に深く謀りける
「地」お花と呼べる美人あり
「地」曾て學校スクールに在りし時
「干」抑や山木は川島の
「地」屢々出入る度び毎に
「干ノ落シ」川島家は資產あり
「干」浮世知らずの其の上に
「地」老母一人の氣樂もの
「地」我れも華族の舅ぞと
「中干」斯る家庭の習ひとて

「千」娘お花の我儘は
「地」行儀作法もあらばこそ
「千」お花は武夫に懸想して
「地」虚榮を夢む淺猿しさ
「千」武夫は浪子を妻として
「大千」千助の樓にありと聞き
「千ノ落シ」女性の常と云へながら
「地」泣つ怨みつ狂ひつゝ
「地」自から霧らす術もなく、
「千ノ落シ」何に譬へんよしもなく
「地」叶はぬ戀に有りながら
「中千切リ」子爵夫人は妾なりと
「地」其れも一時の泡夢や
「千ノ扇ヒ」新婚旅行に伊香保なる
「千」深き嫉妬は中々に
「地」又た一入に加はりて
「千ノ切リ」果は心も戀の暗
「地」病ひの床に打ち臥しぬ

「千ノ切リ」あゝ世は戀なるか金なるか「地」親の思ひは如何なりし

姑と嫁

「地」世に姑の機嫌程
「地」箸の上げ下げ始とし
「千」六ケ敷ものは勿るべし
「千」つまらぬ事に角立てて

「中干」家庭の風波は是よりぞ
「干ノ切」武夫の母も其れなりき
「干」自我獨尊の我が儘は
「干」心に染まぬ其の時は
「中干」女中や下女に飛び走る
「地」去れば女中の常として
「干」蔭には互ひに罵りて
「干」浪子は此家に嫁きけり
「干」浪子を自己が膝近く
「地」嫁の涙の種となる
「地」夫此の世を去りてより
「中干」次第〳〵に增長して
「大干」癇癪玉は忽ちに
「干」舊式主義の怖しさ
「地」表面計りは働けど
「地」果ては逃げ出す輩のみ』
「中干」其夜父なる大將は
「干ノ落シ」訓す言葉も懇ろに

「中干」『片岡浪は今日を限りにて
「干」又た家毎に家風あり
「干」必ず我家を習ふなと
「干ノ切リ」此の世を去りし母君の
「干」浪子は心に泣きたりき
「地」一日浪子は嬉し氣に
「地」過ぐる緣談の其時に
「地」武夫は至極優しくて
「干」さて實際に來て見れば
「干」明日は川島浪なるぞ
「地」宗風は夫れ〳〵に相違あり
「大干」慈愛に餘る其の聲は
「中干」其の面影に髣髴たり
「地」の御言葉の優しさに』
「中干」心の裡に思ふやう
「干」我が父上は宣まへき
「干」己が心に叶へりと
「地」父の言葉の夫れよりも

「干」一入情け深くして
「中干」大和男の凛々しさは
「干」散るも散らぬも君故と
「地」夫の愛に引替へて
「中干」殊に持病の心經痛
「地」癇癪の筋忽ちに
「中干」何の容赦もあらばこそ
「干」乳母のお幾を窘めつゝ
「大干落シ」姑心の淺猿しさ
「中干」又鷹揚に薩張りと
「地」何に譬へん櫻花
「中干」深くも契り交はせしが
「干」姑は我れに物辛く
「干」劇けしく起る其の時は
「干」額の上に現はれて
「地」浪子が里より供へし
「中干」嬰ては里に戻しける
「地」末は涙の種なりし

浪子の書簡

「地」今日や明日やと指折りて
「地」戀しと思ふ折りからに
「干」其名も馨る香港に
「干」只々懷かしく〳〵
「干」嬉しく讀つゝ
「地」何の恙も御座さぬは
「干」數ふる月日は最と長く
「地」過る七月十五日
「地」認め給へる文の文字
「中干」讀みては返し繰り返し
「地」烈しき暑さに御障りも
「干」悅び事の限りなく

「千　又た此の許の母上の
「千　心地勝れて御在すれば
「地　夫れに付ても妾の身
「千　淋しく過し候も
「地　母上様の御機嫌を
「地　心を碎き候も
「千　失策る事の多くして
「千　只々御歸りの早くして
「地　顧ら夫れを樂しみに

「中千　御病氣すらも此の節は
「中千　御心安く御思召せ
「地　日毎〳〵の朝な夕
「千　御留守の事に候得ば
「千　損せぬ樣に叶ふやう
「地　不束ぬ身の悲しさは
「地　最ど困りて候得ば
「中千　無事なる御顏を見ん事の
「地　其日を暮し居り候

「千　雨降る夕べ風の夜半
「千　此の身に翼のあるならば
「大千　御側近くに身を寄せて
「中千　日毎夜毎に御寫眞と
「千　今日は何れか明日は何所
「大千　神に祈りつ御佛に
「千　何卒御身體御大切に
「地ノ地　文字さへ細る筆の蹟

「中千　淋しさ悲しさ遣る瀬なく
「中千　空ら飛ぶ鳥の其れならで
「千　積る思ひを語り度く
「地　世界の地圖を打ち眺め
「中千　風雨の障り無きやうと
「地　願へら〳〵候得へば
「地　早く御歸り遊ばせと
「地　焦る〻心は如何ならむ

不如歸と告天子

「地」自つからなる調べもて
「中干」汝が身をいざや祝ふまし
「中干」汝は鳥にて鳥りならず
「中干」上るは汝が火の雲か
「中干崩レ」調べは落ちて地の上に
「地」姿は消て青空に
「地」天つ空より雲井より
「干」滿し心を謳ふなる
「干」樂しき魂よ待て暫時
「干」見上ぐる空にほの〳〵と
「干」上る間に〳〵猶響く
「地」謳ふまに〳〵跡かすむ

「干崩レ」沈む夕日を照り返す
「地」跡を付けつゝ馳するなり
「干」未だ新らしき悅びの
「干」飛び行く儘に消て行く
「地」登る朝日と諸共に
「干」只々何時迄も喜びの
「地」白む東の光りにて
「中干」所在定かに見えぬ迄
「中干」空に行衞を失なひし
「地」黃金の雲に汝が影は
「地」雲より雲にうつるなり
「中干」燃えつゝ上る如くにて
「中干崩レ」影は綠りの天の原
「地」星の隱るゝ如くにて
「中干」聲のみ空に殘りけり
「干」次第に消え行く月の影
「干」夜はほの〳〵と明けにけり
「地」其の身の影も是に似て

其二段

「地」明け離れたる朝空の
「中干」晝の光りは世に滿ちぬ
「地」宇宙は今ぞ汝が聲を
「中干」人に知られぬ其身には
「干ノ崩レ」空を色彩る夕ふ暮の
「地」愉快に果て無き音樂の
「干」淋しき雲に月落ちて
「干」又た夜を殘す色もなし
「干」受けて響を高めたり
「地」似たる物こそ無かりけり
「干」虹の雲さへ降らし得ぬ
「地」雨の滴も其の身より

「地」妙なる思に身を焦す
「地」心の儘に聲たてゝ
「地」浮世は希望に誘はれて
「干」雲に聳ゆる高殿に
「地」知られぬ戀を漏らさんと
「地」告天子の聲も又たそれよ
「中干」宿る谷間の草蔭に
「中干」天つ光りをほの〴〵と
「中干崩レ」黄金の色を花に葉に
「干」詩人の如く唄ふらん
「干」歌人の如く謳ふらん
「地」畏怖の心を忘るまで
「中干」靜かに響く琴の音は
「干」すさぶ乙女が業やらん
「干」妙なる調べの琴に似て
「干」身を置く露の花蔭に
「地」放つ螢るの如くにて
「干」散らす螢の如くなり』

「地」そよ吹く風に破られて
「中千」顔は青葉に隱せども
「地」心を空に融かす迄

其三段

「地」草葉にそゝぐ朝雨か
「中千」其の嬉しさも新さも
「地」及ばぬ物は大空に
「千」花に濕ふ夕露か
「千」猶は美くしき其の色も
「地」響き滿ちたる其の調べ
「千」またき紐とく薔薇の花
「千」隱れぬ色香は飛ぶ蝶の
「地」あゝ此の花か其の愛は

「千」我に敎へよ其の胸を
「千」明暮空に歌ふらん
「千」斯く迄清き悅びの
「地」凱歌の曲も琵琶歌も
「千」空ゝさ調べとなりぬらん
「千」其の響には調べには
「千」去れば知らじな末つひに
「中千」野邊か深山か海原か
「大千」世の苦しみはいざ知らぬ
「地」如何に樂しき心もて
「中千」愛を稱へし言葉にも
「千ノ切リ」滿ちたる聲は未だ聞かず
「地」汝が音樂に比べては
「地」甲斐無き響さと消ぬらん
「中千」缺けし光のあればこそ
「地」其の源は何方ぞ
「千」雲より上の大空か
「千」聲ぞ如何なる愛ならん

「地」苦痛の影は何時とても
「千」其の喜びの清ければ
「地」幸ひ滿てる汝が歌の
「中千」寢てか覺めてか其身こそ
「地」人間界に知られたる
「中千」玉の調べの流れ來し
「千」過去と未來は見ゆれども
「地」知るか我身の悅びも
「地」知るか樂しき我歌も

「地」其の身をよきて過るなり
「中千」盡せぬ愛こそ常盤なれ
「千」戀はる戀路の悲みも
「千」生死の海も極むらめ
「千」其れよりも深く猶遠く
「地」其の源ぞ汝なれ
「中千」今ぞ無きこそ悲しけれ
「千」苦痛に生れしものなるを
「千」悲哀を告ぐる聲あるを

「地」愛憎驕奢恐懼なく
「千」生れ來りし人ならば
「千」我が人界の如何にして
「地」樂の拍子の其れよりも
「中千」熟練深き其身こそ
「千」人間界を見下して
「千」其の身に持てる悅びの

「地」又た涙をも流さずに
「地」習ひ來りし世なりせば
「中千」其の喜びに近づかん
「千」書の敎への其れよりも
「地」天地に優れしものならむ
「地」嘲けり笑ふやよ鳥よ
「地」其の半ばだに分てかし

浪子の病ひ

「地」月に叢雲花に風
「中干」浪子は繼母の手を出て
「干」繼母に勝れる姑の
「干」浮世知らずの乙女子が
「大干」又々憂ひは增鏡
「中干」遠洋航海に趣きて
「干」儘にならぬぞ浮世なる
「地」樂しき夢も昨日今日
「地」彼れよ是よの口惡に
「中干」小さき胸に堪へ兼て
「干」力らと賴む夫人は
「干ノ崩レ」語るも問ふも波の上、

「地」留守は覺悟の事なれど
「中干」心細さの數々は
「干ノ崩レ」遠き空のみ慕ひける
「干」風の心地に臥りしが
「干」聞くも憐れや結核の
「干」只ださへ飽ける姑の
「干」添ふて間も無き此の別れ
「大干」唯々斷腸の思ひにて
「地」一日浪子は勝れじと
「地」日增に募る病症は
「中干」重き病と知れければ
「干ノ切リ」心はいとゞ不快なり

逗子の涙

「地」早きは月日の流れかも
「干」世はいつしかに改まる
「地」都の空や逗子の里
「干」咲て亂れし白雲の
「干」朝より降れる春雨は
「地」煙りの如く罩めて
「地」昨日と暮し今日と經つ
「中干」目出度き春も重なりて
「地」見渡す限り山櫻
「中干」卯月初めの土曜日に
「中干切リ」海も野山も一色に
「地」只さい永き春の日の

「干」果しもあらぬ心地せり
「中干」雨に風さい加はりて
「中干崩レ」怒りて哮る相模灘
「地」濤に馴れたる村人も
「干」斯る雨風を事とせず
「干」横須賀出て今ま茲に
「干」浪子が挿せる櫻花
「地」軈て浪子は指折りて
「地」昨日や今日と思ひしも
「地」日暮方より降り出す
「干」戸障鳴る響凄じく
「干」萬馬狂ふか濤の聲
「地」只だ怖ろしく戸を鎖じぬ
「中干」武夫は浪子を案じつゝ
「地」一と間の裡の對座へ
「干ノ落シ」餘念もあらず眺めしが
「地」言葉徐かに語るやう
「地」早や一と年とぞりむける

「干」去歳の祝のありし日を
「地」燃ゆる思ひの赤坂や
「地」三五の月を浴びながら
「干」坂を彼方に上る時
「干」馬車の窓よりヒラ〳〵と
「地」軈て馬車より下りる時
「干」伯母が氣付て徐りけるも
「地」其の面影の偲ばると
「干」語るを聞てニコ〳〵と
「地」彼の時馬車に打ち乘りて
「地」溜池橋を渡りつゝ
「地」雪かと疑ふ山王の
「中干」盛りの花の櫻花
「中干」吹雪の如く散りけるか
「地」髷に留りし花片を
「中干」未だ眼の前にあり〳〵と
「地」過る一夜の語り草
「中干」武夫は浪子を覗きつゝ

「地」嗚呼一と年は夢の間よ
「干」銀婚式を迎ふべし
「地」お澄し方の可笑さは
「地」笑ふ言葉の尾に次いで
「地ノ地」若殿樣でチンとして
「地ノ吟」酒盃持つは持ちたれど
「地ノ吟」夢の如でと語るのを
「干」さてお話しの面白や
「干」去年の春の蕨狩り
「地」彼れ是れすると又直ぐに
「中干」而し彼の時浪さんが
「地」思ひ出しても可笑いと
「地」だつて貴郎も彼の時は
「地」お澄しなさる彼の姿
「地」持てる兩手は震へ勝ち
「地」聞て姥は嬉し氣に
「地」妾も心が清々と
「中干」伊香保に遊ぶ思ひすゝ

「干　姥母の言葉にホク〳〵と
「中干　自己が病ひも忘れ顔
「干ノ落シ　最早時候も進みけり
「干　又も伊香保に蕨狩り
「地　優しき言葉に悅びつ
「干　心ながらの樂しさは
「干　和氣は一室に滿ち滿て

＊　＊　＊　＊

「地　浪子は更らに興深く
「地　武夫は妻を慰めて
「地　浪さん早く全快なりて
「中干　今度は僕が勝つべしと
「地ノ抱きンと　屹度妾しも癒ります
「地　語るも問ふも春の夢
「中干　愛の女神も笑ひける

＊　＊　＊　＊

逗子の浪　其二段

「地　沖に白帆のチラ〳〵と
「地　今日は暴風雨も靜まりて
「中干　南の風も暖かく
「地　武夫は浪子と打連れて
「中干　近くに見ゆる伊豆の山
「大干　白砂青松連なりて
「地　村の漁師の一と群れが
「干　鏡の如き相模灣
「干　空は綠に晴れ渡り
「干　海の景色も勝れける
「干　徐かに濱邊を彷徨へば
「干　遙かに輝やく富士の峰
「中干ノ落シ　又一入の眺めあり
「干　可笑き節の聲々に

「地」 地曳の網も面白し
「干」 乾ける砂に跡つけて
「地」 行けば程なく不動堂
「地」 腰打ち掛けて慰めつ
「中干」 優しき聲の身に染みて
「干ノ切」 心の底迄勇み立ち
「地」 今は病ひも忘れけり
「地」 岩が滑るよ危ないよ
「干」 肩掛を敷て只だ二人
「地」 二人は興じ笑ひつゝ
「中干」 此所や彼所の海の邊を
「干」 其の傍らの岩の上に
「干」 勞れはせぬか浪さんと
「干」 最と嬉れし氣に樂しげに
「干」 西洋迄も行けますと
「干」 武夫は浪子の手を把りて
「中干」 扶けて上る又た一歩
「地ノ地」 浪子は武夫を仰ぎ見て

「地」 癒りませうか此の病ひ
「中干」 波打ち際を眺めつゝ
「大干」 武夫はハッと思ひしも
「地」 今日に限つて浪さんは
「地」 屹度癒るよ癒るよに
「中干」 醫師の言葉もあるものを
「中干」 必定癒るよ癒さぬは
「大干」 僕を愛する心のあるならば
「中干切」 浪子の右手を持ち添ひて
「地」 俄かに其身は悄然と
「干」 眼には時雨の色見えぬ
「地」 去あらぬ體に打ち笑ひ
「干」 何故其の樣に云へまする
「干」 僕が癒さで置くべきか
「干」 癒す精神のあるならば
「干」 僕を愛せぬ心なり
「干」 必らず治る筈なりと
「地」 我が唇に押當てば

「千」祝言の際に武夫より
「地」四邊を射りて輝けり
「千」無言の儘にありけるが
「千」屹度妾は癒りなす
「千」死と云ふ事のあるやらん
「大千」死なば二人で諸共に
「千」武夫の膝に寄り添へば
「地ノ地」萬一浪さんが亡くなれば
「千」浪子の黒髪をかい撫て
「千ノ落シ」贈りし指環燦然と
「地ノ地」二人は暫時默然と
「地」浪子は笑を帶びながら
「中千」噫々〳〵人間は何故に
「中千切リ」千年萬年生き延びて
「地」彼の世とやらへ、ねへ貴郎
「地」武夫は詞優しくも
「地」僕も生ては居らぬぞと
「地」話は次第に沈みしが

「千」斯ては果じ果まじと
「地」斯な話しは止しませう
「中千」金婚式の末迄も
「地」愛と情とは溢れけり
「中千」袖と兩手に握りしめ
「千落シ」武夫の膝に落しつゝ
「千」譬へ妾は死ぬるとも
「千」誰れが如何がに申すとも
「千」未來〳〵の後までも
「中千」俄かに心を取り直し
「千」二人供々康健に
「千」供に樂しく語らんと
「千」浪子は武夫の手を取りて
「大千」熱き涙をはら〳〵と
「地」深き情の御言葉は
「中千崩レ」『浪は貴郎の妻ですわ』
「中千崩レ」病氣したつて死んだつて
「大千」浪は良人の妻ですわ

「地」又も話しは沈み勝ち
「地」浪は何處に碎くらん

「干」逗子の眺めの春の海
「地」寄せては返す音ばかり

ほと〻ぎす

「地」名たゝる月は痴雲に
「干」色めく花は狂風に

「干」光りの色を失へば
「干」其の薫りをば空しふす

「中干」美玉碎けやすくして
「地」只々何事も〳〵も
「地」茲に二人は手を把りて
「地」又の逢瀬を契りつゝ
「地」武夫は家に歸りける
「地」折りてそ好けれ今日てそと
「中干」言葉の端も嚴かに
「中干」浪が忌しき彼の病ひ
「中干」一粒種の我が血統

「干」甘泉兎角竭やすく
「干」儘にならぬ浮世哉
「干」盡ぬ思ひに袖絞り
「干」逗子の別邸を後にして
「干」豫て待ちつる母上は
「干」武夫を膝に近づけて
「干」武どん聞て給はれよ
「干」御身に傳染事あらば
「中干落シ」忽ち此に亡き來て

「地」薩摩隼人と謳はれて
「中千」上の覺えも目出度くて
「中千」我が家の絶ゆる因ならん
「大千」一人の嫁に替へ難し
「千ノ崩レ」醫者よ藥と中々に
「千」家の大事を謀りつゝ
「千」病る浪子を去るべしと
「千」孝を立つれば道ならず
「千ノ崩レ」浮世の義理を如何にせん
「千」武門の譽れ最と高く
「千」華族の列に連なれる
「千」家の血統の重くして
「中千」只々其れのみか夫れのみ
「中千ノ崩レ」果しの付ぬ彼の病ひ
「地」母の心を想へなば
「中千」思ひ設けぬ其の言葉
「中千崩レ」道を立れば孝ならず
「千ノ落シ」現在病る我が妻に

「地」離別の事を語りなば
「地」其の悲みに堪へ難く
「中千」病ひに死ぬるは命なれど
「中千」思へ起せば染み〳〵と
「地」其の心根を偲ぶれば
「地」あゝ何事ぞ何事ぞ
「中千」心は千斷る如くにて
「地」其れは餘り阿母さん
「千」語るを母は打ち笑ひ
「地ノ地」只々さい弱き女氣の
「千」彼れは其の儘死ぬるべし
「千」心に死なすは道ならず
「千」逗子の濱邊の物語り
「千」如何で去られん去らるべき
「千」抑もや天魔の魅入りしか
「地」徐かに母に打ち對へ
「地」何卒許して給へよと
「中千」武ぢん妻は可愛くも

「千」親は可愛くあらぬのか
「千」其の行末を謀るのみ
「千」不孝者ぞと不興顔
「地」百年千年變らじと
「千」あゝ如何にして去らるべき
「地」母も怒れり我れも又た
「千」武夫の身には一大事
「千」艦出を告げる公の命
「千」儚かに母を慰めて
「地」私は御身が可愛くて
「地」親の言葉を用へぬは
「地」去れど病と知りながら
「地」契りし妻の罪なきを
「地」二言三言爭そひば
「地」折から來る電報は
「中千」我身の常に乘り組める
「地」今は猶豫もなり難し
「地」我が身の戻る其れ迄は

「千」譬へ浪子は死ぬるとも
「千」浮世の義理と人の道
「千」他人にも語り給ふなと
「地」更らに主治醫を訪ぷて
「千」其日の汽車に打ち乘りて
「地」武夫の心は如何なりし
「地」必らず離縁を仕給ふな
「中千」武夫を察し給はらば
「地」堅く言葉を誓ひつゝ
「地」浪子の上を托し置き
「中千」再び逗子に下りける
「千」嘗て血を吐く不如歸

逗子の涙

「地」胸の憂也朦也人知らぬ
「地」寓方はあらず獨り立つ
「中千」身はゆられ行く滊車の中
「地」鶴見の驛も神奈川も
「地」程なく來たる大船に
「千」武夫の耳に入らばこそ

「千」嘆きの霧の籬笆にも
「千」夏野の芒 本意なく
「地」品川 大森 川崎や
「地ノ地」心の急ぐ程ケ谷と
「地」乘替告ぐる其聲も
「千ノ落シ」横須賀行きに飛乘れば

「地」早や鎌倉も眼の前に
「地」長き日和も何時しかに
「中千」鎌倉山の彼方なる
「千」チラリと見ゆる月影に
「千」白き砂路を一と筋に
「千」仄かに聞ゆる爪音は
「千」あゝあゝ琴の音色かと
「千」武夫は少時門の邊に
「地」左あらぬ體に入り行けば

「千」軈ては來る逗子の里
「千」夕陽 西に傾むきて
「千ノ崩レ」湧紫 の雲間より
「地」野川の橋を渡りつゝ
「中千」暗き林 に別け入れば
「中千崩レ」誰れを待つやら想夫憐
「地」思ひば心も千切るなり
「千ノ落シ」涙の雨を拭ひ去り
「千」浪子は武夫の顏を見て

「地」沈み勝なる面影に
「干」もしや恙はあらぬかと
「地」只々夜深しと紛らしつ
「地」空も曇れり月もまた
「地」食事に着けど進み得ず
「干ノ切り」折から迫る終列車
「干」今は已むなく立ち上り
「干」確と浪子の手を把れば
「地」黒眼勝なる其の目元
「地ノ地」常に變りし顏の色
「中干」訝かる聲を打ち消して
「干」心の裡に泣きたりき
「干」斯て二人は對座へ
「干」問ふも語るも物淋し
「地」時刻も既にあらざれば
「中干」直ぐに歸るよ浪さんと
「干ノ落シ」浪子は聲も優しげに
「干」熟と武夫を覗きつゝ

「地」早く歸つて頂戴な
「干」切なる聲に送られて
「地」戀の暗路を輝しつゝ
「地」再び彼方を振り向けば
「中干」打振りながらねへ良人
「地ノ地」早く歸つて頂戴よ
「中干」武夫の耳に響きけり
「中干」我が身の上を斯く迄に
「干」斯る心も知らずして
「地ノ地」早く歸つて頂戴よ
「干ノ切り」下僕の持てる燈火に
「干」門邊を出て數十歩
「干」浪子は白き手巾を
「地」早く歸つて頂戴な
「干」再び叫ぶ其の聲は
「干」あゝ彼の心彼の心
「地」慕ふ心のいぢらしさ
「中干」我が母上は去るべしと

「干」宣給ふ心其の心
「大干」儘にならざるものなるか
「中干」徐かに浪子を打見やり
「中干」三度び彼方を振向けば
「地」早く歸つて頂戴な
「干」三度聞ゆる其の聲は
「大干」逗子の濱邊の憂き別れ
「干」此の時空に悲し氣に
「中干扇レ」あゝ世の中は斯く迄に
「干」武夫は心に亦た泣つ
「干」直ぐに歸るよ浪さんと
「干」白き姿は朦朧と
「地ノ地」早く歸つて頂戴よ
「中干」後を慕ふて咽び來る
「中干扇レ」片破れ月の影淋し
「中干切リ」啼くは血を吐く不如歸

豐島の海戰

「地」鷄の林に風立ちて
「地」吉野や浪速秋津洲
「干」七月二十有五日
「地」ほのかに見ゆる敵艦は
「中干」打ち出す無禮の彈丸に
「中干扇C」浪さへあらぶる豐島海
「干」ゆきゝの雲の脚はやし
「地」探る牙山の道すがら
「中干」あかつき深く立つ霧の
「干」名に負ふ濟遠廣乙號
「干」怒るは人と神のみか
「干」我が軍如何でかためらはむ

「地」互に戰ふ程もなく
「干ノ切リ」追へども〳〵散々に
「地」忽ち見ゆる二艘の艦
「地」勝ちに乘りたる我が艦の
「中干」憐れや白旗高く立て
「地」打ち出す我の一發に
「地」折しも波風をさまりて
「地」東の空を仰きつゝ
「大干」天皇陛下萬々歳
「干」逃るか卑怯の彼の二艦
「干」行衛も知れずなりにけり
「干ノ落シ」牙山を指して急ぐなり
「干」進み〳〵て取り捲けば
「干」早くも降れり操江號
「干」高陞號は沈みたり
「干」清さ喇叭の聲起り
「中干」世界を動かす勝閧は
「中干」日本海軍萬々歳

「干」斯の勇ましき勝閧は
「干」川島武夫も又たこゝに
「地」征清軍の首めにて
「地」勇み猛りて從がへぬ

黃海の役　其一段

「地」我が海軍はいち早く
「地」又も浪路を蹴破りて
「干」豐島沖に戰ひつ
「干」衝きしは何處威海衛

「地」彼の北洋の艦隊は
「地」我が聯合の艦隊は
「中千」秋も半を過る頃
「中千」端なく起る艦戰
「千」或は碎き又は燒き
「地」其の勳しは黃海の
「地」あはれ昨日は平壤の
「千」艦の數々打ち沈め
「千」神の祐くる皇軍に
「地ノ地」名のみ殘して影もなく
「千」海原廣く占めにけり
「千」海洋島のほとりにて
「地」逐つ逐せつ彼の艦を
「千ノ崩レ」底の藻屑と成し果てぬ
「千」波音高く響くなり
「地」敵打ち拂ひ今日はまた
「地」海陸幷び進み行く
「中千」いづれの敵か對ふべき

「千」川島武夫を始めとし
「千」得意の狀ぞ想ふべし

黃海の役

其一段

「地」煙も見えず雲もなく
「地」鏡の如き黃海は
「地」空に知られぬ雷か
「地」我が海軍の武士が
「地」さても愉快の艦戰

「千」風も起らず浪立たず
「千」曇りそめたり時の間に
「千」浪にさらめく電か

「中千 煙は空を立てこめて
「地 戰ひ今かたけなはに
「千 尊とき血もて甲板は
「千 彈丸は碎けて飛び散りて
「千 其の玉の緒を勇氣もて
「地 副艦長の過ゆくを
「地 苦しき聲を張り上げて
「地 呼び留られし副長は
「地 聲を絞りて彼は問ふ
「千 天つ日影も色くらし
「地ノ地 勉め盡せる勇男の
「中千 から紅に飾られつ
「地 數多の傷を身に負へど
「中千 つなぎ留たる水夫あり
「地ノ地 痛む眼に打ち眺め
「千 彼れは叫びぬ副長よ
「地ノ地 彼の傍にとたゝずめり
「千 未だ沈まづや定遠は

「中千 憐れ副長の眼はうるはへり
「地 去れども聲を勵まして
「千 心やすかれ定遠は
「中千 戰ふ力も無くなれり
「地 其の聲聞て水兵は
「千 左も嬉し氣に樂げに
「中千 最後の微笑を漏しつゝ
「地 程なく息は絶え果てぬ
「千 皇國に盡す皇軍の
「地 向ふ所に敵もなく
「千 旭日の御旗うら〳〵と
「地 東の洋を照すかり
「千 未だ沈まづや定遠は
「地 其の言の葉は短かくも
「地 皇國を思ふ國民の
心に長くしるされぬ

旅順口攻撃

「地」明治二十有七年の
「干」未だ明けやらぬ東雲に
「干」敵の籠れる取手にて
「干」砲壘堅固に山嶮はし
「干」此時味方の砲兵は
「干」小松が原を楯に取り

其一段

「地」十一月の二十一
「中干」ほのかに見る椅子山は
「地」夥多の旗を翻へし
「地」是なん今日の關ヶ原
「中干」左手の山のふとてろに
「地」威勢鋭く控へたり

「干」軈て旭ともろ共に
「干」萬雷一時に轟さて
「干ノ崩レ」空に漲る砲煙は
「中干ノ落シ」かゝらぬ峰も無き計り
「干」後れはせずと爭ひつ
「地」士官は之を誘導し
「中干」其の一彈に十餘人
「干」仆るゝものを踏越へて
「地」凝り固りし忠義心
「地」砲火の聲も勇しく
「地」天地も爲に震動し
「干」霞か霞か白雲の
「地」はやり立たる吾妻武士
「中干」戰友互ひに楯となり
「干」劔の林彈の雨
「地」又た隊長の副馬まで
「干ノ切リ」射れども衝ども何のその
「干」只一と線に進み行く

「地」折しも優しき上官は
「地」靜かに兵士を休憩し
「地」喇叭の聲も勇ましく
「中干」命と賴む砲聲を
「地」あな勇しや勇しや
「中干」旭日の御旗もろともに

「地ノ地」一首の和歌を口吟み
「干」再び傳ふる號令に
「干」登り〳〵て敵兵の
「干」取つてぞ跨る椅子の山
「干」大和男兒の勳しは
「干」世界の果まで傳ふべし

旅順口攻擊

「地」地の利を占て人の和に
「中干」北風寒く吹き閉ぢて
「中干」椅子山落しと聞からに
「干ノ切リ」勇む心は春駒の
「干」中にも勇氣絶倫と
「干」九州男兒の名に耻ぬ

其二段

「干」加へ來りし天の時
「干」敵の妖氣を拂ひつゝ
「干」血氣にはやる武夫の
「地」繫ぎて止めん山もなし
「地」音に響きしつはものは
「中干」混成旅團の一群なり

「地」此の一むれの將卒が
「中干」隊伍揃へて堂々と
「干」折しも敵の一彈は
「干」憐れ胸板射貫たり
「干」名殘の聲を張り上げて
「大干崩レ」云ふにや及ぶ其の仇は
「地」呼はる聲と諸共に
「中干」松樹一二龍の敵兵を
「干」勇む折りしも彼方にて
「干」はやる心を押し靜め
「地」歩調正しく進み行く
「地」先に進みし我が兵の
「中干」深手に屈せぬ勇卒は
「大干」我が隊長よ此の仇を』
「干」今、目の前り報ゆべし
「干」斃れし屍飛越へて
「地」蹄の塵になさんとて
「中干」忽ち天地を震動し

「干」黑煙空に逆のぼり
「地」見へしは心の迷ひにて
「中干」我を迎へる日の丸の
「中干崩レ」嗚呼これ人爲か天祐か
「干」經營辛苦の旅順口
「干」其の功勳や如何ならん
「干」旭日の御旗諸共に
「中干」あはや地雷に打れぬ
「干」早晩　敵の壘上に
「干」旗は凛々しく立にけり
「地」清國一と賴みてし
「地」またゝく暇に乘取し
「地」さてゝ愉快の大和武士
「地」世界の果まで傳ふらん

旅順攻撃　其三段

千々曲の戰死

「地」抑も旅順の攻撃を
「地」十一月の二十日の夜
「中干」時は三時の暗の道
「地」敵壘近き波狀地に
「地」明れば二十一日の

「干」準備せよとの命令は
「干」勇氣勃々潜み行く
「干」谷間を辿り川に沿ひ
「地ノ地」時機の來るを待にけり
「干」未明を期して進擊の

「干ノ落シ」待間も遠き我が右翼
「干」砲擊烈くし立ち起り
「地」中にも第二の大隊は
「中干」國の爲なり君の爲め
「中干」協同一致を能く守り
「干」二龍山なる砲臺を
「干」進む途中に五里坊の
「干」雨の如くに飛び來るを
「地」進み近寄る砲臺に

「地」水師營なる裏手より
「中干」擊ち出す合圖に進み出る
「干」豫て覺悟の腕前を
「干」現はす各自の本分と
「干ノ崩レ」我れ　れしと名も高さ
「中干」我が　擊の目標と
「中干」前後は特に砲彈の
「干ノ切リ」事ともせずに整々と
「干」迫りつ打出す急射擊

「地」好機宛も今なりと
「地」撓まず屈せず生あるを
「中千」咫尺も辨せぬ硝煙の
「中千」聲諸共に飛込みし
「千」奪ひ取りしは午後一時
「千」鎖鑰と頼む渤海の
「大千」北京城下の盟こそ
「中千」大和櫻の色見する
「千」堂々軍旗を福岡の
「千」一號令の其の下に
「千」知らぬは固有の大和魂
「千」中を割き行く突貫の
「中千」崩に二龍鷄冠　二砲臺
「中千」なるか、ならぬの束の間に
「中千」敵の關門打ち破り
「千」今暫くの冬籠り
「千ノ崩レ」時てそ春の彌生なれ
「中千」舞鶴城に捧持して

「地」歸る時てそ今暫し
「地」此の戰役の其の折に
「大千」陸軍中尉千々曲安彦は
「中千」腹部を深く貫ぬかれ
「中千」敵の砲疊睨みつゝ
「地」人の譏も世の義理も
「地」死場所得たる者なりと
「千」國の爲なり君の爲め
「中千」川島武夫の弟兄なる
「千」憐れ打ち出す敵彈に
「千」無念と叫ぶ一と聲に
「千」旅順の花と散りけるは
「千」心の塵も洗はれて
「地ノ地」却つて譽れを留めける

金州城

「地」萬里の波濤を乘り越て
「中干」打靡かせんと進み行く
「地」頃は十月中旬にて
「干」花園口の河口に上陸す
「干ノ崩レ」山岳重疊天險に
「中干」日頃の勇氣百倍し
「干」高麗唐國の端までも
「干」益良武夫の雄々しさよ
「中干」我軍等しく敵地なる
「中干」音に聞えし大陸の
「干」屍を曝す能き處
「地」月日の照さぬ其先に

「大干」我が大君の大稜威
「地」あゝ勇ましき其姿
「干」輝かすべき時は來ぬ
「地」あゝ勇しき武夫よ

其二段

「地」遙かに望む高樓の
「中干」其名も高き金州城
「地」我軍目懸けて打ち出す
「干」空に聳ゆる城郭は
「干」數十の砲門打ち揃へ
「地」折柄玆に我が軍は

「千　目に物見せて呉んずと
「千　天地も轟く計りなり
「千　知らで防ぐか敵兵は
「地　我が有力の進擊に
「地　瞬く隙に擊滅し
「中千　其の屍は累々と
「地ノ地　實に愉快なる勝ち戰
「中千　打ち出す數萬の銃聲は
「地　爰一瞬の名殘とは
「中千切リ　憐れにも亦健氣なり
「千　敵砲次第に衰へて
「千　數百の敵兵此所彼處
「千　山をも築かん計りなり
「地　萬歲天地を震動す

旅順の偵察

「地　敵の堅固と頼みたる
「千　旅順砲臺偵察の
「地ノ地　敵は流石に用心し
「千　大砲小銃轟然と
「千　空にはぢかせ我が軍は
「中千　彈丸は霰と飛び違ひ
「地　鞍支連峰險を越え
「地　任務を帶びて進みける
「地　我近づくを合圖とし
「中千　打ち出す敵の彈丸は
「千ノ落シ　一齊放火凄ましく
「千　響く砲聲萬雷の

「大干　一時に鳴るに髣髴り
「中干　照る日の影も朦朧と
「地　されど忘るゝ偵察の
「地ノ地　爰一瞬の復命を
「干　其の目的を達せしは

黄海の激戰　其三

川島武夫の負傷

「干　硝煙空をたてこめて
「干　あや目も別かぬ凄しさ
「干　任務を果せし其の上は
「地　徐々に敵をばあしらひて
「地　實にも愉快の事なりし

「地　見渡す限り黄海は
「中干　遙かに見ゆる島影は
「中干ノレ　悠々として靄よりも靜なり
「中干　修羅の場所と成り行くは
「干　此時川島武夫は
「干　右絃砲臺に馳せ行けば
「地ノ地　雙眼鏡を上げながら
「地ノ地　部下の砲員兵曹は
「干　腰より上は臂迄の
「干　月を浮べて物白く
「干　睡眠の夢を浮べつゝ
「干　斯る眺も忽ちに
「地　早や目の前の事なりき
「中干　今しも艦橋を下り行きて
「地　分隊長は今將に
「地　敵の方をば望みける
「地　概ね短表衣脱き棄て
「地　襯衣を繩ひて潮風に

「干」黒める腕を露はしつ
「地」腹部を卷ける者りあり
「地」此の時我の先鋒は
「中干」已に敵前を過んとす
「地」全速力を現はして
「中干」雙眼鏡を手に取りて
「干」敵の中堅を固めたる
「大干」横陣は稍〻鈍角を現はして
「中干」武夫は之を打ち見やり
「干ノ切リ」白の木綿に確がりと
「地ノ地」默して號令を待ちにける
「干」敵の右翼を亂射しつ
「中干切リ」中にも旗艦の松島は
「干」敵前近く進みつゝ
「地」遙かの方を打ち見れば
「中干」定遠鎮遠を眞先に
「干」距離は漸くに縮まりぬ
「地」左も冷かに笑ひつゝ

「干」深く心に期したりき
「干」空中遙か鳴りを打ち
「干」海に落るや凄まじく
「干ノ崩シ」此時武夫も冷かに
「干」忽ち足を踏み固め
「干ノ切リ」砲尾に群がる砲員の
「干」又た其の儘に靜まりて
「地」飛び來る彈は四ツ五ツ
「中干」端艇を粉と碎きける、
「地」忽ち海上轟きて
「地」松島の大檣を掠めつゝ
「中干」二丈餘りも水上げぬ
「地」一種の感に打たれしが
「地」同胞は如何にと打ち見れば
「地」列は一と度び搖ぎしが
「地ノ地」艦は愈々進みける
「干」其の一彈は左舷なる
「干」此の光景を打ち見たる

「千　武夫は最早堪ねる
「大千　敵艦打ての號令は
「中千朋レ　五千四千と數へ來き
「地　照尺此に整へて
「千　待ち構へたる一と聲の
「大千　『打ッ』の號令諸共に
「千　右舷の側砲一齊に
「地　打ちつ打たれつ戰へは

「千　分際長よ未だですか
「千　軈て聞ゆる少突の
「千　遍ねく右舷に傳はりぬ
「地ノ地　牽索忽ち握られぬ
「中千　喇叭は高く鳴にけり
「中千扇レ　三十二珊の巨砲を初とし
「千ノ切リ　彈は直ちに迸ばしる
「地ノ切リ　愈々烈しくなりにける

武夫の負傷其四段

「地　さしもに廣き黄海も
「千　我が松島の答禮に
「中千切リ　巨彈の響き凄まじく
「地　上を掠めて海に落つ
「地　思はず下に振り向きぬ
「中千　御辭儀をするは誰なると
「千　浪は熱湯の如くなり
「千　放つは定遠鎮遠か
「千　空に隈りて我が艦の
「地ノ地　此の物音に砲員は
「千　分隊長は顧みて
「地　武夫を始め砲員は

「干」堂と笑ひつ興じける
「大干落シ」『打てッ』の號令勇ましく
「地」後に續きし我が艦も
「地」此の時又たも敵の彈
「地」武夫の後に立ち居たる
「地」其塲に撞と倒れつゝ
「中干」武夫のズボンを染めたりき
「地ノ地」分隊長は顧りみて
「干」さては負傷は川島か
「地」打てや打つべし確乎りと
「干」右舷の砲は連放我ち
「干」我れ後れじと打ち出しぬ
「地ノ地」砲臺近く破裂して
「干」我が砲員の一人は
「干」鮮血さつと迸しり
「地」戰死は誰れぞ誰れなるか
「地」武夫の姿を打ち眺め
「地」傷は輕きか如何あるぞ

「地ノ地」武夫は莞爾と打ち笑ひ
「干」斯して我の本隊は
「地ノ地」敵の陣をば半周し
「干」まさに背後に出むとす
「地」茲に終りて第二回
「地」鳴を靜めて憩らへぬ
「干」互ひに其の虛を覗さしが
「干」敵の右翼を亂射して
「地」其の艦隊を眞中に
「地」負傷にあらで餘瀝よ
「地」或いは射つゝ且つ馳せて
「地」其の右翼を廻りつゝ
「中干」第一回の戰へは
「地ノ落シ」我が松島の砲門は
「地ノ地」此の時彼我の陣形は
「地」我が先鋒は逸早く
「地」彼れの二艦を惱しつ
「干」圍みて將に擊んとす

「地　戰へ今は酣に
「千　又も打ち出す敵の彈
「千　砲臺内に破裂して
「大千　武夫は撞と倒れしが
「地　心は矢竹に逸れども
「千　又たゝ尻居に倒れけり

「地ノ地　時刻は正に午後三時
「中千　霹靂天地を震動し
「中千　雨や霰と飛ぶ丸に
「千ノ落シ　無念と叫び刎ね起つ
「地ノ地　身動きさへも成り兼て
「地　火災は艦に起りける

威海衛陷落

「地　世にも名高き威海衛
「千　逃ぐべき方も無き儘に
「地ノ地　捕子となりし敵兵の
「千　我が手に落し敵艦の
「千　海と陸とに斯くばかり
「地ノ地　廣き世界の歷史にも

「千　我が益良男に攻められて
「地　早やかゝげたり白き旗
「地　數は百萬二百萬
「地　數は百舟、はた千舟
「地　雄しき功績を立たるは
「地　絶えて例しはあらざらむ

「千　さは去りながら此の爲に
「地　身をし思へば悲しさに
「地　殊に惡さは西國の
「地　彼れを思へば口惜さに
「地　此の悲みを口惜さを
「地　捕へし舟を繫ぎつゝ
「地　千舟百舟萬舟
「地　尻居の方に繫さてむ
「中　清き眞榊押し立て
「中千　命を棄し益良男の
「千　絞られにけり我が袂
「千　心穢なき夷し　舟
「千　扼せられけり我が腕
「地ノ地　報い晴さむみの爲めに
「千　繫し敵の其の舟に
「地ノ地　其を又た更に我舟の
「地ノ地　さて又た次なる御舟には
「地　先に失せにし人々の

「千　御魂の限り祭り來む
「地　櫻の花を取りかざり
「地　高く掲げて祝ひ來む
「千　君が御代をば謳ひつゝ
「地ノ地　海のてとゞ圍らばや
「地ノ地　さて又た次なる御舟には
「千　我大君の御姿を
「地ノ地　斯く種々に粧ひして
「地　强しと誇る外國の
「地　其の港をば圍らばや

威海衛の占領

「地　大元帥の下げまし、
「中千　聯合艦隊海よりし
「地　陸より進む軍隊は
「地　第六師團は右縱隊
「千　九州男子の豪膽を
「地　譬へ骨をば降り積る
「中千　東北武士の勇猛を
「地　例へ屍を張りつめる
「地　總攻擊はいつの日ぞ

「千　大詔畏みて
「千　第二軍は陸よりす
「地ノ地　道を二手に持ち分けて
「地ノ地　第二師團は左縱隊
「中千　世界に示すは此の時ぞ
「千　雪のみやまに埋むとも
「千　宇内に鳴らすは此の時ぞ
「地ノ地　氷の河に洒すとも
「千　明治廿有八年の

「中千　第一月の三十日なる
「地　二手の道を一と筋に
「地　砲煙彈雨の中とても
「地　百尺崖や鹿角嘴
「地　瞬く間に海陸の
「中千　遂に二月の第二日
「千　其の功績は後の世に
「千　我が日の本の御旗をば
「大千　大元帥の稜威をば

「千　拂曉頃と定めらる
「地ノ地　互ひに競ふつはものは
「千　いかでか人に後るべき
「地ノ地　揚家屯をも謝家所をも
「千　各砲臺を攻め落し
「大千　威海衞を占領す
「地　永く唱へて傳ふべし
「地　山東省に飜へし
「千　渤海灣に輝かし

「地　いざ諸共に打ち連れて
「千　彼れが最後の降服を

「地ノ地　敵の城下に進みつゝ
「地　聽て見むてそ樂しけれ

浪子の離別

「地　逗子の濱邊に只一人
「地ノ地　あゝ我が夫よ我が夫よ
「地ノ地　早く歸つて頂戴と
「千　戀しき良人慕へつゝ
「地　早く歸つて頂戴な
「千　一と度び再び又三度び

「中千　祈る心も水の泡
「地　必らず去るな去るまじと
「千　堅き誓ひも反古にして
「地　斯る事は露知らず
「地　姥のお幾と只二人
「地　我が夫人の無事なるを
「地　相へ見る事の早かれと
「地　迎への人に連られて
「地　自己が里へと來て見れば

「千　武男の留守に姑は
「地ノ地　我が子と共に語りたる
「中千　憐れ浪子を離別しぬ
「地ノ地　浪子は逗子の別邸に
「地ノ地　今日や明日やと指折りつ
「地ノ地　祈り祈りて一日も
「千　願へし甲斐も情けなや
「地ノ地　思ひも寄らぬ赤坂の
「地ノ地　所せましと押し並ぶ

「千　山なす品は誰あらふ
「千ノ落シ　川島家に嫁く時
「地ノ地　今しも此所にあらんとは
「地　今は何をか樂まん
「中千　只だ此の上は懷かしき
「地　御側に行へて語らんと
「地　父中將は勞りつ
「千　厚き慈愛を垂れ給ふ
「千　再び逗子へ出養生
「地　誰にもあらず己が身の
「地　里より運びし品なるに
「千　さても幸なき我身かな
「千　有て甲斐なき此の生命
「大千　彼の世に居ます母上の
「中千崩シレ　死のみを願ふ哀れさを
「地ノ地　且つ慰めて種々に
「地　恩と愛との柵らみに
「地　過し昔しを夢むのみ

名殘の逗子

「地　又た來ん爲めに唯しばし
「地ノ地　雲の帷をのぞきつゝ
「地ノ地　波間に色を照り返へす
「千　手に手を取りて只々二人
「千　彼れは江の島是は富士
「千　今は昔しの夢なりき
「千　消ゆるは影か　幻か
「地　壁にかすめる日の光
「地　帶一と筋の砂の道
「地ノ地　景色の中に畫がれつ
「地　語りし事も問ふ事も
「地　逗子の野山に春たけて

「干　蒼み數多の花の色
「地ノ地　こぼれそめたる梢には
「干　聲面白く聞ゆなり
「地ノ地　たばねて鳥に送るらん
「中干　彼方に見ゆる不動堂
「地ノ地　過し夢路の樂しみを
「干　其の新婚の年月を
「地ノ干　見渡す限り樂みの
「干　あゝ此の景色此の影よ

「地　そよ吹く風に誘はれて
「地　三つ四つ來なく駒鳥の
「地　風は花輪を幾度か
「干　美を以て滿たす其の胸に
「地　其の岩の上に腰掛て
「地　眺め渡たさば如何ならん
「地　共に數へば如何ならん
「地　光りならざるものもなし
「地　よし〳〵我は嘆くまじ

「地ノ地　昔しに指を屈むまじ
「干　夢の影こそ悲しけれ
「干レ崩　ぬらす袂は誰が爲めぞ
「干　彼の世に在ます母上に
「干　あゝ儘ならじ儘ならじ

佐世保病院

「地　去れど心に針をさす
「中干　餘る涙は誰が爲めぞ
「地　清き臥床に枕して
「地ノ地　逢て語らん此の思ひ
「地ノ切　げに儘ならぬ浮世哉

「地」世にも知られし黄海の
「中干」川島武夫は傷つきて
「地」ノ地早一と月を過しけり
「干」眞只中に破裂せし
「干」狂へる丸に當られて
「地」ノ地少時心も無かりしが
「干」脚部の傷は二ヶ所とも
「地」其の他は僅かの火傷のみ
「中干」落シ我が同僚は戰死して
「干」壯烈無比の戰ひに
「地」茲ば佐世保の病院に
「地」思へば彼の時砲臺の
「中干」敵の榴彈亂れ飛ぶ
「地」尻居に撞と倒れつゝ
「地」我れに返へりて能く見れば
「中干」怠所の骨を避けありて
「干」分隊長は骸もなく
「地」部下の砲員無事なるは

「干」殆んと稀なる其の中に
「地」今は佐世保の赤十字
「地」ノ吟替リ熱も劇しく上り來て
「地」或は敵を罵りつ
「干」屢々醫員を驚かし
「地」されば血氣の若者の
「干」眞心盡す人々の
「干」痛傷は次第に薄らぎて
「中干」一日武男は只だ一人
「中干」不思議の生命を取り留めて
「地」ノ地最初の程は中々に
「干」床の上の譫言に
「地」ノ地又た分隊長を叫びては
「中干」其の赤心を現ノぬ
「地」ノ地傷も左までは重からず
「中干」看護の甲斐に嬉しくも
「地」心地も常に復しける
「干」ノ崩レ降り來る雨の淋しさに

「地」窓の彼方に身を寄せて
「地」庭の景色を眺めつゝ
「地」届く荷物の一と包み
「地」其名は更らに知らざれど
「中千」涙を洗ぐ千行の
「地」中なるものは何なるぞ
「中千」縫る衣の針程に
「地」瞥むる胸は忽ちに
「大千」あゝ浪さんよ浪さんと
「千ノ崩レ」露に濡れたる夕暮の
「地ノ地」戰地を想ふ折りからに
「千」送りし人は誰れなるか
「千」吾が名を書ける筆の跡
「千ノ崩レ」文字はあり〳〵己が妻
「千」あはれ病ひをつとめつゝ
「千」心を籠し數の品
「千」塞がる如く覺へつゝ
「中千切リ」武夫は暫時男泣き

戰後の墓地

「地」太鼓の音も聽かず
「地」空しき骸を打ち載せて
「千」墓地に向へし其一時に
「中千」只々一發の砲聲も
「千」我が英雄を送り行く
「地」嵐も眠る眞夜中に
「千」樂の調べも流れ來ず
「地ノ地」墓に急ぎし其の時に
「地」別れを告る兵卒が
「地」聞えぬ空のさびしさよ
「中千」墓のほとりは寂として
「地ノ地」銃の先もて芝土を

「地」堀り起しつゝ葬むりぬ
「千」燈火青く月くらし
「千」顔打ちおほる布もなし
「千」勇士の狀を其まゝに
「地」言葉少なに祈禱しつ
「地」死顔とくと打ち守り
「中千」我が腸は絞るまで
「地」思ふも哀し此の首は
「地」我等は聽て此の土地を
「地ノ地」消ては燈る遠方の
「地」骨を納むる棺もなく
「地ノ地」去れど疲れて打ち眠る
「中千」軍服胸に照させて
「地ノ地」嘆きの聲は立てねども
「千」明日は如何にと思ひやる
「千ノ切り」狹き臥床を設けつゝ
「千」敵の及ばにかゝらずや
「千」波路遙かに別れなん

「地ノ地」魂ひ去りし亡さ骸を
「千」去れど其身を同胞の
「地」眠らば恨も遺るまじ
「千」早や退軍の時近し
「地」打ち出す敵の銃音か
「地」涙を拂ふ手は遲く
「地」立つべき石も垣もなく
「地ノ地」彼れを此の地に殘しつゝ
「地」見つけて敵や罵らん
「地ノ地」つくりし墓に横へて
「地ノ地」半はうづみ畢りたり
「中千」忽ち響く山彦は
「千」あな忌はしやあな無情
「地ノ地」漸々埋み畢りたり
「千」されど名譽と諸共に
「地」故國に歸る我が思ひ

浮世の眺め

「地」夕暮れ告る鐘の聲
「地ノ地」群がる鳥は彼の森に
「干」身を休めんと歸り行く
「干」暗と我れとの只々二人
「干ノ崩レ」只々沈み行く夕ふまぐれ
「地」滿て空をも蔽へたり

其一段

「干」響く方より暮れそめて
「地」小田の農夫は我が家に
「地」地上に立ちて殘りしは
「中干」四方の眺はほの暗く
「干」物淋しさの色ばかり
「地ノ地」眠氣に響く鈴の音は

「地」休みおくれし小羊か
「地」蔦に其の身をうづめたる
「中干」月に對へて訴ふる
「地」隱れ家近くねらひよる
「中干」夜は只だ靜か唯しづか
「地ノ地」此方の杉の木のもとに
「干」連なる石は誰がものぞ
「干ノ切リ」長き夢をや結ぶらん
「地ノ地」梅が香送る朝風も

「地ノ地」虫の羽音もかすかにて
「干」塔の屋根には梟の
「干ノ切リ」聲より外に物もなし
「干」敵とや我を思ふらん
「地」彼方の松の下蔭に
「地」積れる土は何なるぞ
「地」岩床深く枕して
「地」村の先祖は皆てゝに
「地」しば泣く鶏の朝聲も

「千　友呼びかはす燕も
「地ノ地　寒さ眠りの枕をば
「地ノ切リ　呼べど答ふる聲もなし
「千ノ落シ　他所の寒や防ぐらん
「地ノ地　又た立てわぶる妻もなし
「地　笑顔あつめて父の膝
「地　麥は幾度び其の人の
「地　畑は幾度び其の人の
「地　逐やる野邊の牛馬も
「地　反響にかへす笛の音も
「地　又た呼び起す術もなし
「千　馴れたる閨の埋火も
「地　夕飯の煙り我ためにに
「千　家に歸れば待遠に
「千ノ切リ　圍みし子等も今何處
「地ノ地　鎌にかゝりて刈れけん
「地ノ地　鋤にすかれて榮えけん
「千　伐出す森の松杉も

「地　只々其の人に任せしを
「地　詫しく世をば送りたる
「千　やよ輕しめの眼もて
「千　其の勞働を見下すな
「地　功名利達其の儘に
「地　美女三千にかしづかれ
「地　一と度び死期の來る時は
「中千　墓の外には何ものぞ
「地　頌する子孫なしとても
「地ノ地　やよ高慢の心もて
「地ノ吟リ　替り其の人々を笑ふなよ
「地　利益を村に殘したる
「千ノ落シ　天の授けし運なるぞ
「地ノ地　願ひて得られぬ事もなく
「千ノ切リ　巨萬の富は極むとも
「千　只々邯鄲の夢のあと
「千　紀念碑建て功業を
「地ノ地　先祖の德は消え失せじ

「地」先祖の光りはかゝるまじ
「中千」轟く讃美の歌聲も
「千」壯嚴美麗の廟屋に
「地」死者の耳には何かせん

其の二段

「地」反魂香の煙にも
「千」像に刻みて千載の
「地」阿諂ふ聲も稱賛の
「地ノ地」呼び戻されぬ面影を
「中千」世に遺しても甲斐ぞなき
「地ノ地」其身に餘る言の葉も

「地」死者の耳には何かせん
「地」抑も何ものか眠るらん
「地」世に照り返す詩家の胸
「千」人の心を春になす
「千」去れど磨かぬ白玉は
「地ノ地」光りはあれど山影に
「千」一度び春の風吹かば
「中千」惜ら氷に閉ぢらして
「地」人見ぬ波を照すらん
「千」嗚呼此の苔の下深く
「千」天つ光りを身に受けて
「地ノ地」政事を握る其の腕は
「地」樂師の指と諸ともに
「地」光り無くして終りたり
「地」埋れし儘に過したり
「大千」流れ出づべき山水も
「千」千尋の海の水底に
「千」眞珠の數は幾千ぞ

「千ノ崩レ」深山の奥の草蔭に
「地」花の色香や如何ならん
「地」村の失政怒りたる
「地」筆を執りては書ざりし
「地」血の流れをば見せざりし
「地」横はりつゝ諸共に
「中千」誘るも何か羨やまん
「千」圍り來らんよしもなし
「地ノ地」五穀成就を祈るこそ
「千」知られぬ春を見せて咲く
「千」暗の錦の甲斐なさよ
「地ノ地」小英雄も此の墓に
「地ノ地」小文豪も此の墓に
「地ノ地」小將軍も此の墓に
「千」生殺與奪の權を得て
「中千崩レ」榮枯盛衰其の身には
「地」只々國の爲め民のため
「地」其人々の望みなれ

「千」血に易へ得たる王位には
「地」慈悲の門をば世の中に
「千」限りある身の運命は
「千」力ら協せて世と共に
「千」受る心の苦しみを
「地」蔽はん爲めに捧げたる
「地」詩歌の巧みも何かせん
「千」塵の浮世の波風も
「千」成らぬ望みを夢に見て
「千ノ切リ」即けと勸むる人もなく
「地ノ地」鎖せと告ぐる人もなし
「地」限りなき身の善根と
「地」我が良心をあざむきて
「中千」隱さん爲めに其の耳を
「地ノ地」浮世の神の供へもの
「地ノ地」清き心の彼等には
「地」他所に隔てゝ住む身には
「地」心なやまず夜半もなし

「千」細谷川を行く水は
「千」靜けさ歩み運ぶらん
「地ノ地」土の上には一片の
「千」表面に刻む其の文字の
「千」幾旅人のはらわたを
「千」石の上には著るく
「地」其の年月も書かれたり
「地」是れぞ數多の村人に
「千」文字なさ里のよき敎へ
「中千」濁らぬ月の影のせて
「地」去れど枯骨を埋めたる
「地」紀念の石を殘したり
「地ノ地」蹟は拙なく見ゆれども
「地」斷せて露にぬれつらん
「中千切リ」主人の名こそ讀まれたれ
「地ノ地」經の文句も彫られたり
「地ノ地」死に行く道を諭すなる
「地」是ぞ此の世の華ならめ

其三段

「地」苦樂こもゝゆきかひて
「地」望と共に投げ捨て
「地」又た躊躇はず泥さはず
「地」死に別れ行く其の時に
「地」冷えたる胸にや殘るらん
「地」閉ぢたる目にや溢るらん
「千」心惱すこの浮世
「地ノ地」此の身と共に離別して
「千」忘るゝ人は誰ならん
「千ノ崩レ」此の世の名殘何時迄も
「地ノ地」別れの涙いつまでも
「千」愛の焰は何時迄も

「地 灰の内にや燃えぬらん
「干 譽れの花も咲ずして
「地ノ地 只々徒らに歌にのみ
「干 今も族の人たちが
「干 汝の昔し問ふならば
「地ノ地 里の翁は語るらん
「地 日の出を見んと朝早く
「地 あれ又た今朝も彼處にと
「中干 うねりは高く又た低く
「干ノ崩レ 咽ぶは人か夜嵐か
「地 此の世を去りし人々は
「地 短き傳記を殘すなり
「地 沈む思ひに堪へかねて
「地 雪を頭に戴さし
「干 草葉の露を踏み分けて
「地ノ地 登りなれたる岡の道
「干 言ひし朝もいく度びぞ
「地 根はる川邊の柳かげ

「干 腰打ち掛けて昨日まで
「干ノ切リ 伸ばす身體も見られたり
「地ノ地 立てる姿は其のまゝに
「干 はゝ笑み歩く其の人の
「干 心に何をか憂ふらん
「地 絶し望みや夢むらん
「地 彼れ彼の人と朝ごとに
「中干 木蔭に今朝は影もなし
「干ノ崩レ 野にも山にも跡絶えぬ
「地 日和ぼこりの樂し氣に
「地 下行く水に見とれつゝ
「地 森の木蔭の遠近を
「中干 物思はしげの顏色は
「干ノ落シ 見捨てられたる戀人の
「地ノ地 頸打ち垂れて悄々と
「干 指さしなれし片岡の
「干 軈て其の夜も又た明けて
「地 日の出拜みし岡邊にも

「地　身を伸したる川邊にも
「千　哀しき歌に送られて
「地ノ地　彼は墓路に向へたり
「中千　留めて朽ちぬ歌の文字
「中千　春の光りに逢ざりし
「中千落シ　花の譽れを受けざりし
「千　木深き谷に潜みつゝ
「地ノ地　送りし人は唯此所に
「地　又た其の次の朝も來ぬ
「地　柩は寺に向へたり
「千　見よや木蔭の石碑に
「千　讀て知るべき君なれば
「千　身は此の土の下にあり
「地　身は此の苔の底にあり
「地　涙の内に生涯を
「地　あゝ何事も浮世なり

夜半の眺め

「地　武夫は獨り病室に
「中千　浮世の中の憂き事を
「地ノ地　徐かに謳ふ聲聞けば
「千　生とし生る物は皆
「千　巣に包まれて打ち眠る
「地ノ地　心地よげなる雛の子の
「千　過越し方を想へやり
「地　いざや歌にて霽さんと
「地　夜半は來たれり宇宙に
「地　夢に遊ばぬ者もなし
「地　鳥よ子鳥よ親鳥よ
「地　鮮は母の胸ならん

「千 水も眠まり海も又た
「地 星は下界を見下して
「千 花か黄金か其の影は
「千 勞れ休むる時は今
「千 鹿の枕に死も寄せず
「千 其の夢までは襲ふまじ
「千 聞かぬ夜半の我閨に
「地ノ地 森に倒れし大鹿の
「地ノ地 また獵人のあと絶て
「中千切リ 平和の影は野に森に
「地ノ地 大空高く笑ふなり
「地 天地萬物すべて皆
「地 兎の床に犬も來ず
「中千 雉の恐るゝ熊鷹も
「地 熊も眠れり砲音の
「地 犬の恐れをよそに見て
「千 枕にさはる風もなく
「地 臥猪の床も夢しづか

「千ノ切リ つとめし畫の報ひをば
「地 受てぞ休む天も地も

滊車と滊車

▲浪子と武夫の生別れ

「地 山城宇治の黄蘗を
「千 見れば肥滿の老紳士
「地ノ地 今しも出る三人連れ
「地 一人の淑女を携へて

「地ノ地」後に供を從がいぬ
「地ノ地」車は此方にガラ〳〵と
「千」淑女の顏を顧みて
「地ノ地」慈愛溢るゝ其姿
「地ノ地」車は後に從がひぬ
「中千」浪子を連れし京めぐり
「中千レ」崩やが軈て三人は山科の
「地」東行列車に乘り込みぬ
「千」西と東に行き違がふ
「地」門に待ち居し三輛の
「地」曳くを紳士は優げに
「地」歩行をするも身の爲めと
「地」淑女も共に悅びて
「千」是ぞ片山大將の
「千」供は姥のお幾なり
「千」プラットホームに現れ
「地ノ地」折から來る神戸行き
「中千」滊車と滊車との摺れ違ひ

「地」窓と窓との其の裡に
「中千」此方は川島武夫にて
「千」良人と叫けぶ一と聲に
「千」二度と遇れぬ滊車の裡
「中千」浪子が投げし白巾を
「大千」打ち振りながら別れ行く
「千」互に見交す顏と顏
「大千」彼方は片山浪子なり
「中千」おゝ浪さんと答へつゝ
「地」積る思ひの嬉しさに
「千」片手に受けて莞爾と
「地ノ切」武男の胸や如何ならむ

浮世の戀

「地」喜怒哀樂は人の身を
「干」戀の使ひの外ならず
「地ノ地」養はれてぞ燃え出づる
「地」屢々我は遊びつゝ
「中干」彼の青山の墓の邊に
「干」いま月影は地に落ちぬ

「地ノ地」心の儘に動かせど
「地」戀の焔は己が手に
「干」醒めて夢見る夢の裡
「干」樂しき時を過すなり
「地」我が運ばれて立し時
「中干」夕べを殘すくれなゐの

「干」空の光りに交せられて
「地」乙女は其所に立ち居たり
「干」其の傍らに立ち居たり
「干ノ崩レ」夕べの影か其の人か
「地ノ地」其身は少しの哀しみも
「干」あはれ望みよ喜びよ
「地ノ地」心一つに聞き居たり
「中干崩レ」かなひて凄き古歌の曲
「大干」琴の調べも我れながら

「大干」戀の望みの喜びの
「地ノ地」乙女は彼方の石碑の
「中干」月のあかりを身に受けて
「地」只々我が歌を聞き居たり
「地」知らぬ乙女よ我が戀よ
「地」哀しますべき我が歌を
「干」夜も更け行ける墓の邊に
「干」謳ふにつれて澄み渡る
「干」低く哀しく身にしみて

「中干」紅そゝぐ頰の色
「地」優しき乙女は猶そこに
「地」我がまごゝろや知ぬらん
「中干」我は乙女に聞かせたり
「地」十年の長き年月を
「地」他人の戀を身に寄せて
「地」身に蒐めたる哀みを
「地」己が心を言はせつゝ
「地」下に傾く眼の光り
「干ノ切リ」下にかたむく眼の光り
「地ノ地」押へかねつゝ打ち守る
「干」昔し語りを初めつゝ
「干」彼の石碑の其の人を
「干」戀に送りし一曲の
「地・地」我は語れり其の人の
「干」沈みし古歌の一と節に
「地ノ地」紅そゝぐ頰の色
「地ノ地」優さ乙女は猶其所に

「干」只だ愛以て打ち守る
「干ノ切リ」去れど勇氣の武士が
「干」また夜晝の差別なく
「地ノ地」我は乙女につゞけたり
「地」我が眞心や許すらん
「地」亂るゝ戀に狂ひつゝ
「地」波路に馳せし物語り
「地ノ切リ」其の海戰のありし日を

其二段

「地」天つ使はあはれなる
「中干」光り輝やく翼もて
「地」影をも武者は見留たり
「地」知らずに武者は飛び入ぬ
「干」死にも優れる恥辱より
「干」其の戀人の泣く涙
「地」されど狂氣は救ひ得ず
「地」譏りは遂にかへし得ず
「干」武者は空洞に身を置ぬ

「干」石碑の前にぞ現はれし
「干ノ切」其時惡魔の立ち居たる
「地ノ地」何を爲しかいざ知らず
「地ノ地」惡魔の中に突き入りぬ
「地」彼の戀人を救ひたり
「中干切」武者の胸をやぬらしけん
「地ノ地」あはれ戀路に亂されし
「地ノ地」其の戀人に扶けられ
「地」狂氣は遂に止りぬ

「干」去れど呼吸なき骸こそ
「干」今はの言葉あな憐れ
「干」震へる聲に供なひて
「干」止り勝なる琴の音よ
「干」胸に打ち込む釘ならん
「地」話し悲しくなる儘に
「地」身を襲ひ來る其望み
「干」見るに見られぬ其刺戟
「地」潛み隱れし其の願ひ

「中干」枯渠の床に眠りたれ
「地」今ぞ哀しき我が調べ
「地」聽者の胸や亂すらん
「中干」語る言葉は聽く人の
「干ノ落シ」腹にさし込む針ならん
「干」空は愈々暮れ渡る
「地ノ地」望みを燃す其の恐れ
「中干切」深き心の水底に
「地ノ地」悲喜交々に亂しつる

「地」乙女の顔に紅を
「地」低く我名を呼ぶ聲は
「干」乙女の胸は溢れたり
「地」足は此方に動きたり
「干」忽ち我に近づきぬ
「干」我が身を半ば圍みたり
「地ノ地」頭を少しうなだれて
「干」眼に示さるゝ色よりも
「地ノ地」先づ我が胸に響きしは
「干」散すや戀の耻かしさ
「地ノ地」其の唇に響たり
「地」我が眺むるを知りながら
「地ノ地」辱かしげなる其の眼
「地」乙女は腕をさし延べて
「干ノ切リ」我れか乙女か愛の手か
「地」顔見上げつゝ言葉なし
「地」心に觸て傳はりて
「干」恐るゝ聲か愛の音か

「中干」浮世の戀の種々は
「地」あはれ可笑きものなりさ

青山の墓地

浪子の墓

「地」會者定離の悲みに
「地」追慕の思ひ遣せなく
「干」淵瀨を歩る心地して
「人干ノ崩レ」武夫は涙を拭ひつゝ
「干」哀慟の泪は雨霰れ
「地ノ地」只だ夢の浮橋浮しづみ
「中干」茲青山の墳墓に
「地」墓標の下に立寄りて

「地ノ地」やゝ萎れたる花立の
「千」自から持てる白菊の
「大千ノ切リ」手向の水を供へつゝ
「地ノ地」紀念の文を取り出し
「地」折しも小兒の聲近かく
「中千」此方を指して驅け來たる
「地ノ地」浪子の遺書を持ちながら
「地ノ地」墓前に立てる其人は
「中千」片山大將閣下なり
「地」花を徐かに拔き棄て
「中千」花の一枝優しくも
「地」妻なる人の遺したる
「千」涙ながらに打ち見やる
「千」あれ川島の兄いさんと
「地」武夫はハット驚きつ
「地」涙を拂へ振り向けば
「千」是ぞ浪子が父君の
「大千ノ崩レ」無手と武夫の手を握り

「千ノ切リ」武さん私も辛かつた
「千」千萬無量の思ひあり
「千」我れと我身に歸りつゝ
「地」武さん浪は死ぬるとは
「千」熱き涙はハラ〳〵と
「千」あゝ浪さんは苔の下
「地」互ひに握る手の裡に
「中千」軈て片山大將は、
「中千」武夫の肩を撫でながら
「地ノ地」私は卿への爺ぢやぞと
「中千ノ崩レ」落つる木の葉を浸しける
「地ノ切リ」さても浮世は夢なりき

露霜

「地」千草の花もなく虫の
「地」淋しき庭に只だひとり
「中千」頂く霜に置く露に
「千」あゝ幼な子よ白菊に
「千」露も我が身のくすりなり
「大千」此の露霜にくづをれず

「地ノ地」聲も何時しか枯れはて〻
「千」咲き匂ひたる菊の花
「大千」たゆまぬ樣こそ尊けれ
「中千崩レ」一歩も讓らずよく勵め
「地」霜も我身のくすりなり
「千」學ばゞ遂に白菊の

「千」いと香しき匂より
「地」あゝおさな子よ白菊に

「中千切リ」遂かにまされる譽れあり
「地ノ切リ」一歩も讓らずよく勵め

枇杷の花

「地」錦と見えし秋の野も
「地」蟲の聲々哀れなり
「地」風のまに〻水の葉ちり

「千ノ落シ」千草見ながら霜がれて
「地ノ地」雲かと見えし山の端も
「地ノ地」冬の山里もの凄し

「干」斯く種々の草も木も
「干」薫りゆかしき枇杷の花
「大」しのぎて咲るいさはしは
「地」人も宛然斯の如し
「干」たゆまず倦ず學びなば

述懷

「地」枯にし庭に雪うけて
「中干」いとも寒けき北風を
「中干崩レ」好き實をこそは結ぶなれ
「地ノ地」人の怠る其のひまを
「地ノ切リ」よき名を殘さん後の世に

「地」露けき空にきらめくは
「干」節面白き其の歌は
「地ノ地」勞れし足を引つゝも
「地ノ地」其の心地よく吹く風は
「干」曇らぬ日影に照されて
「干」澄み行く水の響さてそ
「干」山の彼方に日は入りて
「干」しめり勝なる夕べにも
「地」旅路は今ぞ名殘にて

「地ノ地」野邊の雲雀の上る影
「地」旅行く人を慰めて
「地」猶たどり行く眞晝中
「地」旅行く人を慰さめつ
「中干」歩みもよわる夏の空
「地」旅行く人を慰めぬ
「地」響く羊の鈴の聲
「地」旅行く人を慰めぬ
「干」馴れし鐘こそ聞ゆなれ

「千只々それよりも嬉しきは「地門に迎ふる愛の聲

新曲 不如歸之琵琶歌 終

明治四十二年六月廿五日印刷
明治四十二年七月二日發行

正價參拾五錢

著作者 佐藤緑葉
東京市深川區西森下町廿七番地
發行者 矢野留吉
東京市神田區松住町五番地
印刷者 菅井十一郎
發賣元 東京 二葉堂
賣捌所 大阪市東區北渡邊町(振替口座二八二三番) 杉本梁江堂

復製不許

216
749

074737-000-5

特63-667

不如帰之琵琶歌

青年琵琶会／編

M42

CEJ-0333